

イギリス的な情景

— the scenes in Britain —

早稲田大学 教授
小田島 恒志

(第13回)

秋のイベント

11月5日は「ガイ・フォークス・デイ」。1605年のこの日、ジェームズ1世の宗教政策（イギリス国教会優遇）に反発したカトリック教徒の一派が国会議事堂を爆破しようとした、いわゆる「火薬陰謀事件」（Gunpowder Plot）が実行直前に発覚し未遂に終わったことを祝う祝日なのだが、実行犯の—いわばテロリストの—名前を祝日の名前にしてしまうとは、いかにもイギリスらしい（法定祝日だったが、1859年に廃止された）。「タフ・ガイ」「ナイス・ガイ」などの「男」「やつ」を表す「ガイ」（guy）という単語も、このガイ・フォークスに由来する。

11月5日には、「ガイ・フォークスの人形」を街中曳き回してから篝火で焚刑に処し、花火を打ち上げるのが習わしであった。今でも花火だけは各地で盛大に行われる。1989年に初めてこの時期をイギリスで過ごした際、知人がロンドン北部のプリムローズ・ヒルで行われる花火見物に誘ってくれた。かなり肌寒い中、丘の上で見上げる花火は、大勢の人が浴衣姿で楽しむ日本の夏の風物詩とはだいぶ趣を異にしていた。

この日に「人形の曳き回し」と「花火」という、子供たちにとっては楽しい、ご近所を巻き込んでのイベントがあるので、直近の「ハロウィン」（10月31日）にはイギリスでは特に何もしないのだ、

と聞いた。かぼちゃのランタンをもって、「お菓子をくれなきゃいたずらするぞ」（Trick or treat）と仮装した子供たちが近所を回るのは、アイルランドからアメリカへ渡り、そこから日本にも伝わってきた風習（イベント）なので、イギリスでは関係ないのだと。確かに、1989年にはそういう印象があった。

2005年にこの時期を過ごした時にも、昔の記憶で知ったかぶって、「ハロウィンは関係ないんだよね、イギリスは…」と高をくくっていたら、どうやら様子が変わったらしい。その日が近づくとつれて、街中がオレンジ色のオブジェやグッズであふれていく。「イギリスでもやってるんですよ、最近は。お菓子を用意しておいた方がいいですよ、いたずらされると大変だから。特に、玄関扉に卵を投げつけられるとか…」と近所の人が教えてくれた。いや、用意しておいてよかった。子供たち—と子供たちをダシにした少し年長の少年少女たち—が次から次へとやってくる。風習も変わるものだ。

ガイ・フォークスの子孫だという人物が高級住宅街のハムステッドでおもちゃ屋を営んでいるという噂を聞いた。どんな思いで花火を売っているのだろう。